ひと

食を通じた「生教育」を語る助産師

内田（うちだ）　美智子（みちこ）さん(57)

「生」の反対は何でしょうか。マイクを手に問いかける。答えは「死」ではなく「生まれないこと」。性教育を言い換えた「生教育」を説いて20年余り。福岡県行橋市の産院から全国の学校や自治体に出向く講演は、年間２００回を数える。

故郷の大分で見た産婆さんに憧れた。助産師になって34年、２８００人を取り上げた。中には死産もあった。ある産婦はにじむ乳を指ですくい、動かない子の口に運んでいた。生と死は紙一重だった。一方で未成年の中絶が後を絶たない。避妊を教えに行った学校の生徒が「妊娠した」と言ってやってくる。もどかしかった。

診察室で15歳の少女が、堕胎を促す母と口論を始めた。「ご飯もろくにつくらないのに、今さら母親面しないで」と言い放った。

そんな10代に尋ねた。「今日、ご飯食べた？」。カップ麺や菓子パンを食べて空腹ではないのに、「食べとらん」と返ってきた。

食に手間を省かれて育った感覚が共通すると知った。食べることは生きること。「食を大切にすれば生が大切に、生を大切にすれば性が大切になる」を持論にした。

講演では親世代には「我が子に何を食べさせますか」と問い、子どもたちには「母さんは命がけで君を産んだ」と諭す。聴いた人がすぐ帰って家族に会いたいと思ってくれたら、語りは成功だ。

文・金子元希　写真・福岡亜純